

## 『認知症VR（バーチャルリアリティ）体験講座』報告

日程：2018年8月21日（火）11:00~12:30

会場：東京都生協連会館 3階会議室 参加者：50名

参加団体：コープみらい、パルシステム東京、東都生協、東京ほくと医療生協、千葉県生協連、日本生協連、中野区桃園地域支えあいネットワーク、東京都生協連



「認知症になると思いを出しづらくなり、代わりに起こす行動が周囲には理解できないものと映ってしまうことが多くあります。表面的な行動は『暴言』『暴力』『徘徊』『帰宅願望』『入浴拒否』などが表現され、“認知症だから起こすもの”と思われがちです。こうした言動や行動は認知症だからではなく、認知症があるご本人の混乱する環境において起きています。」と講師の黒田さんから認知症についてお話があったあと、『VR認知症プロジェクト』は認知症を学ぶのではなく、認知症を体験することで認知症のある方への理解を深めることを目指しているとお話がありました。



黒田麻衣子さん  
(株) シルバーウッド



VRを装着すると、あたかも自分が画面の中の風景にいるかのような錯覚を覚えます。360度、ぐるりと見渡せるのもリアルです。体験する物語は全部で6つ。選択は視線で合わせました。

VR体験をする前に、現時点で「認知症の人」に対して自分が持っているイメージや、感情をワークシートに記入しました。



### 1話目「わたしをどうするのですか？」



視空間失認の症状のある方の実話をもとに作られたお話です。ビルの屋上の端に立たされているところからの場面から始まり、両隣にいる人から「大丈夫ですよ。」「降りましょう。」と何度も促されます。恐ろしくて降りることなどとてもできないと躊躇しているとビルから突き落とされたように感じたあと、実は車から降りるだけだったことに気が付きます。もしも家族や介護に関わっている方がこんなシーンに遭遇して「急いでいるから」と無理やり手を引っ張ったりしたらどうなるか、容易に想像できる体験でした。

## 2話目「ここはどこですか？」

見当識障害の症状を体験する物語です。居眠りをして目覚めたら電車に乗っていました。周りの風景を見てもここがどこかわからない。どこに行こうとしていたのかもぼんやりとしている。駅に着くたびに降りた方がいいのか、このまま乗っていた方がいいのか不安な気持ちのまま終点らしき駅に着き駅員さんに「ここはどこですか？」と尋ねても出口を案内されてますます不安になっていきます。そこに「どうかされましたか？」と優しく声をかけてくれた若い女性に駅まで案内してもらえ事になりました。困っている時に声をかけてもらえる。それだけで安心できる体験でした。



## 3話目「レビー小体型認知症 幻視編」



レビー小体型認知症の特徴は、無いものが見える幻視の症状があります。この物語はレビー小体型認知症当事者の樋口直美さんが脚本を制作し、撮影当日も演技指導を行って作成されたものです。

友人の家に訪問し、玄関を開けると帽子を被った女性が突然現れたかと思うと消えたり、席につくとそこには友人以外の人物や飼っていないはずの犬が現れては消え、出されたケーキの上には虫がいる。という現実か幻視か見分けがつかない中で時間が過ぎていきます。そうい

う状況を家族に話しても否定されることで傷つき、症状が悪化するケースもあることを学びました。

### 認知症当事者からVRでメッセージ

●認知症になってから、自分の会社がどこにあるかわからなくなって道行く人に聞いたことがあります。その時は怪訝な顔をされました。思いきって「私は若年性認知症です。助けてください」と書いた紙を定期的に入れて困った時にはそれを見せて助けてもらうようにしました。そうするとみんな親切に助けてくれ、時には会社と一緒に行ってくれたりすることもありました。自分が認知症であることをオープンにしたら、とても生きやすくなったんです。認知症だということを周囲に知られるのに不安を抱えている人は多いと思いますが、「偏見」は周囲にはほとんどなくて、実は自分と家族の心の中にあるんです。そうした偏見がなくなれば、安心して「認知症とともに、よく生きる」ことができるんじゃないかなと私はそう思っています。(丹野さん)

●レビー小体型認知症はまだまだ認知度が低いため、家族が気がつかなかったり、ドクターでさえ正しく診断できないケースも多いのが現状です。生活の中で「これは幻視？実在するもの？」と常に迷いながら過ごしています。もしそうした認知症の方が現状を打ち明けられたら「気持ち悪いこと言わないで。」と否定するのではなく、一緒に面白がってあげてください。近視、遠視、乱視の他に幻視もあるんだくらいの気持ちで接してくださいとうれしいです。(樋口さん)

あたかもそこに自分がいるようなバーチャルリアリティの世界での認知症体験は、これから認知症の人に接する時の対応についてや、いつか自分がそうなってしまった時に起きることを、我が身を持って考えさせられるものでした。認知症の人がどうしてそういう行動をしているのか、どうして欲しいと思っているのかを当事者から直接お話を聞き、その上で対応するように心がければ、認知症の人が住み慣れた地域で幸せに暮らすことができる社会に近づけるのではないかと思います。2025年、日本は『1300万人認知症社会』になると言われています。認知症のご本人とそのご家族も含めると日本の人口の半分は何かしらの形で認知症に関わる事になるといわれるなかで貴重な体験となりました。